

翻刻資料Ⅰ

杉本喜代巳氏インタビュー記録

奥村旅人* 須永哲思** 福家崇洋***

【解説】

本資料は、杉本喜代巳^{きよみ}氏へのインタビューを文字起こししたものである。杉本氏は京都人文学園の第一期生であり、また卒業後には、京都人文学園及び京都勤労者学園で主事を務められた人物である。インタビューは、2021年から2024年にかけて計三回実施した。最初のインタビューは2021年11月26日にラポール京都において行った。それから間もない同年12月24日に、杉本氏のご自宅へ伺って二度目のインタビューを行った。これらのインタビュー内容にも学びつつ、『人文学報』第122号（2024年6月発行）に「〈小特集〉戦後京都と教育・文化運動——京都人文学園を中心に」を掲載した後、その報告も兼ねて2024年10月28日に杉本氏のご自宅へ伺い、三度目のインタビューを行った。その際には「学生日誌 1947.6.3～1948.4.22」等の貴重な資料を拝見させていただいた（本小特集翻刻資料Ⅱ）。

1927年生まれの杉本氏は、旧制水口中学校を卒業後1946年に京都人文学園に入学、三年間の課程を終えた後は大阪府枚方市で教員として勤務し始めた。その間、京都人文学園は1949年に夜間部を創設し、1950年には夜間制に完全に移行した（この経緯について、詳しくは論文編の須永論文参照）。1951年4月、杉本氏は夜間制となった京都人文学園の主事として、再び学園に戻った。京都人文学園は1957年に京都勤労者学園へと改組するが、改組後にも杉本氏は主事として勤務し続けた。両学園を最もよく知る人物と言っても過言ではないだろう。

以下では、三回のインタビュー記録から、両学園と特に関連のある箇所を抜粋して掲載した。昼間制時代の京都人文学園については学生の視点から見た教員や学生の様子が、夜間制時代については主事の視点から学園の運営の方法等が語られている。内側から両学園を見続けてきた

* おくむら たかひと 京都大学大学院教育学研究科

** すなが さとし 京都大学人文科学研究所

*** ふけ たかひろ 京都大学人文科学研究所

杉本氏ならではの、極めて貴重な証言だと言えるだろう。とりわけ、一回目と二回目のインタビューでは、杉本氏が京都人文学園に通学するまでの経緯や学生の政治活動の様子に、三回目では、京都勤労者学園への改組の内幕にも話が及んでおり、大変興味深い内容となっている。

「はじめに」でも述べたように、このインタビュー記録をお見せできないまま、私たちは杉本氏の訃報に接することとなってしまった。ご冥福をお祈りするとともに、長時間・複数回のインタビューに快く応じていただいただけでなく、貴重な資料の閲覧・撮影をお許しくださった杉本喜代巳氏に、心から謝意を表したい。また、本インタビューの掲載を認めて下さった杉本氏のご家族にも、感謝申し上げる。

制度、海軍飛行予科練習生という制度がありましてね。それに中学の二年の十月に応募しちゃったんですよ。それで、半年間は鳥取県の実徳院にある訓練所で訓練を受けて。あとは半年たってからは三重県の伊勢に鈴鹿航空隊というのがありましてね。そこで搭乗訓練を受ける定やったけど、もう飛行機がなくて、試乗学習だけで終わっちゃって。乗せてはもらいましたけどもね。自分で操縦したりしたことはなかったんですよ。

福家：杉本さんは何年生まれなんですか？ご出身は？

杉本：昭和二年七月二十日。滋賀県のね、現在は甲賀市になってますが、その当時は甲賀郡のね、寺庄村の生まれです。

福家：ご両親は農家をされていたんですか？

杉本：家は、農業と瓦。屋根瓦をね。

福家：将来は農業を継ぐ可能性もあった？

杉本：いや、兄弟がたくさんだったから家を継ぐということは全然なかったんだけど、みんな早く亡くなったり、よそに出たりして、結局僕がその家屋を受け継いだ。七人兄弟。その時はね、五人、六人当たり前でね。ただ、衛生状態やら栄養状態が悪かったから、みんな早死にしたんですよ。うちは、たまたま七人とも全部生きたから。しかし、もう先の年に亡くなりましてね。今はもう、私と弟と妹が一人、三人残ってますかね。

福家：旧制中学は、どの中学校に行かれたんですか？

杉本：滋賀県立の水口。今は名前が変わって。一旦甲賀高校になったけれども、また水口高校に戻ってると思います。

福家：三重の鈴鹿の訓練場に行かれて、鈴鹿航空学校で敗戦だったんですね。そこからまた滋賀に戻られた？

杉本：ええ、復員して行くところもないし。

福家：そこで、どこか学校に行こうと思って、人文学園の広告が目に入った？

杉本：たまたまね、俺の兄貴の兵隊友達で、さっき言いました大地原豊さんに一応聞いてみたら、「信用できるんちゃうか」ということで。

福家：信用できるというのは、やっぱり京大の先生が沢山関わってるから？

杉本：うん、メンバーを見てね。住谷悦治さんとか新村出先生とかね。

福家：大地原さんは、戦後民主主義に対してすごい理解があった方なんですね。

杉本：大地原さんは、良く知ってはりましたね。

福家：入学されて、授業の内容というのは、どういう感じだったでしょうか。

杉本：とにかく、あの時代というのは、混乱期でね。いわゆる価値観がひっくり返った時代で



図2 杉本喜代巳氏肖像（1943年6月20日撮影）杉本喜代巳氏所蔵

したから。だから、要するに、古いものは全て間違いだという風な、ちょっと極端な考え方もあちこちにありましたしね。だから、何が真実かという、そういうことに敏感な時代でしたね。例えば、中学四年間を修了しないと上の学校へ行く受験資格がないんですよ。それで、僕は三年の半分しか行ってないもんだから、また昭和二十一年四月から旧制中学に復学したんですわ。その六月一日、六月からそういう人文学園が開校するというニュースがあって、もうそっち行こうかということになりましたね。旧制中学の方に伺ったら「もうあんた卒業にしとくわ」ということで、その昭和二十年の三月の卒業という風に名簿に載ってますわ。

福家：特に印象に残っておられる授業はありましたか。

杉本：一つは、色んな分野のね、色んな分野って人文系が大半ですけども、特別講義というのが一週に一時間あったんですよ。それにいろんな人が来て、一般教養として話をしてくれてね。その中に羽仁五郎さんがいて発破をかけられた。羽仁説子さんも見ましたわ。

福家：そうですね、一緒に来てた？

杉本：別々だったと思いますね。それは非常に印象深残ってますね。あとは新村出先生のお話とか。竹田省、これも京大の先生でしたし。そういうお二人の、特別講義はやっぱり。

福家：その特別講義は一般の方も参加されるんですか？

杉本：いや、学生だけです。一般の方に対しては、課外講座みたいなものがあったと思います。

福家：普段の授業は、そんなに印象、記憶には残っていないですか？

杉本：そうですね、普段の授業は特に。やっぱり中心的な先生というのは、もちろん新村猛、それから久野収さんね。あとは、青山秀夫ね。その方々が中心的了でしたね。

福家：個人的に先生の家に行ったりとかはしたんですか？

杉本：家にうかがったのは新村猛先生、新村出先生の家にも同居しておられましたけどもね。だから新村家と、あとはそうですね、日本史の藤谷俊雄さんとか、政治学で学園の主事をされていた佐々木時雄さんの家はよく伺いましたね。藤谷さんは日本の古代史が確か専攻やったと思いますね。それから、佐々木さんは、変わった人で。家がお金持ちだったか、京大を学部二つ出てはなんですわ。経済学部ともう一つ、文学部も確か出てはるんですわ。で、僕ら一番影響を受けたのは、やっぱり佐々木時雄さんと市川亀久弥さんね。

福家：どういう意味で影響を受けたんですか？

杉本：やっぱり世界観というか、歴史観って言いますかね。僕らはそんな戦争に対して批判する力も何もなかった。知識もなかったもんですからね。ただ、時に流されて、お国のためだって言われたら、そう書いたと。大抵みんなそうであったと思いますよ。批判するような力も見識もなかったし。

福家：佐々木先生はマルクス主義の影響を受けてたんですか？マルクス主義についての授業ではなかったんですかね。

— 440 —

福家：そうすると、ここにある生徒委員会は、学生たちが自主的に作った？

杉本：ええ、この時期になって作った。生徒会議は入学して十日ほどですからね、多分学校側からのお膳立てじゃなかったかな。

福家：当時皆さん授業はかなり出てたんですか。

杉本：いや、初めは出席よかったですよ。もう満員でした。

福家：満員からだんだん減ってくるんですか。

杉本：そうそう、出席者が減るというよりも、もう進路を変える人が増えてきたんですよ。というのね、学園は卒業資格はないし。例えば、大学入学者って中学だけではあかんでしょ。昔で言うところと高等学校あるいは専門学校でないと、入学試験資格はなかったですから。だから、みんなそれまでの様子見の感じじゃなかったですかね。

福家：人文学園をやめていく人が沢山出てきたことは、先生方はショックですよ。

杉本：そうでしょうね。まだ六・三制が固まる前で、日本の学校の制度がどういう風になるかわからない時代でしたから。いわゆる混沌とした状態でしたからね。生徒もそうならば、教師の方もそんな確かな見通しはなかったと思うんですよ。

福家：とりあえず始めたというか、理念を元に始めた、ということなんですね。

杉本：その時分になってくると、そういう風に人文学園の資格というものを置いて若い青年を集めるというのは無責任だ、という批判が起こってきましたね。生徒の中から。

福家：その中で杉本さんご自身が三年間在籍されてたのは、どういう理由だったんですか。

杉本：乗りかかったから。最後までおったということ。私はね、逃げ道があったんですよ。家が瓦屋でしたから、就職ができなかったら、家の仕事でもしようかという構えでしたからね。

福家：実家が自営業とかやってる人たちは結構残ってたってことなんですかね。

杉本：そういう風にも言えますね。卒業資格がないということは、やっぱり人文学園にとって最大の、なんていうか、弱点というかね。

福家：卒業資格というのは、結局いつぐらいに付くようになるんですか。

杉本：最後までつかないです。各種学校では受験資格は取れません。だから、私も、卒業してから就職する場合も、旧制中学卒の資格で、中学の教師をしましたけれども。

福家：履歴書には、書けるんですよ。いつからいつまで在学したと。

杉本：履歴書には書けますけど。資格は、要するに昔でいう代用教員です。昔はね、高等女学校とか旧制の中学行ったら、そういう講師の資格があった。

福家：当時の政治的な傾向というのは皆さんどうだったんでしょうか。

杉本：学校の授業では、マルクス主義っていうのは何もなかったんですよ。哲学の分野でも経済学の分野でも。経済学は青山さんの近代経済学だし、哲学は久野収さんの、なんていうか、アメリカで起こった流派のやつ。

福家：プラグマティズム。

杉本：久野さんはそっちの方だったし。ただ、生徒の中で、共産党・共産主義に傾いた人がいはって、その人たちがマルクス主義を持ち込んで、結構組織化があったと違いますか。

福家：細胞みたいな。杉本さん自身は、ここに書いているように、社会党に興味があった？

杉本：私は、政治的には、共産党やら社会党やら民社党なんかに分かれんと、イギリス風の労働党みたいな、ああいう緩やかな社会主義政党ができればいいなとそういう考えでしたから。

福家：当時の京都は、高山義三とか蜷川虎三みたいな、民主戦線が盛んだったんですけど、そういうのには関わられたりしてるんですか。

杉本：蜷川さんと高山さんが選挙に出はる時に、ちょっと応援には行きましたね。

福家：そうですか。ピラ撒きとか、そういうことですか。人文学園の学生さんも手伝いに行ったりとかしたんでしょうか。あるいは、杉本さんだけで行かれた？

杉本：いや、何人かと一緒に。あれは一九五〇年でしたかね、昭和二十五年。

福家：そうですか。当時やっぱり高山さんも蜷川さんもすごい人気があったと思うんですけど。

杉本：結構盛り上がってましたよ。

福家：京都人文学園は、労働組合運動との関わりというのは、まだこの時期はなかった？

杉本：労働組合はなかったですね。労働組合と関係者になったのは、京都勤労者教育協会という労働組合を母体とする教育機関がありましてね、それと学園も合体した形で今の京都勤労者学園ができてますから。人文学園時代は接していなかったです。

福家：ぜひもう一回聞き取りをさせていただければと思います。次回、ご自宅にお伺いして、資料を見ながら、お話をうかがいたく思っております。どうもありがとうございました。

杉本喜代巳氏インタビュー（2021年12月24日、杉本氏自宅、抜粋）

参加者（敬称略）：杉本喜代巳、福家崇洋・山本捷馬・須永哲思

福家：前回、貴重な杉本さんならではのお話を聞けたので、ぜひ二回目も色々とお話をお伺いできればと思って来させていただいた次第です。

須永：戦前の滋賀県甲賀市にお生まれになったお話、興味深くうかがいました。改めて、戦前・戦後の暮らしや代用教員時代のことについて、うかがえますでしょうか。

杉本：人文学園が三年制でした。しかし各種学校だけで、いわゆる文部省の規定する資格がなかったんですよ。だから、身分は代用教員、正式には講師という名称で、担当したのは国語と社会科でした。

福家：どういう授業をされてたんですか。

杉本：一応、曲がりなりにも教科書ができていましたから。その教科書に沿って解説する。な

いところは自分の参考文献を探してきて。例えば漢字の成り立ちとかね。そういうことはあんまり教科書に載ってませんから。ものすごいマンモス校でしたね、枚方の樟葉にあったのかな。

須永：代用教員はどちらでされていたのでしょうか。

杉本：大阪の枚方中学校。全市一校のマンモス校。千人から生徒がいてね。

須永：当時の新制中学校は、六・三制が新しくできて社会科も新設教科だった頃なので、とてもご苦労されたんじゃないですか。

杉本：何を教えていいかわかりませんしね。

須永：人文学園で学ばれたことは、社会科の授業をする時に、役に立ちましたか。

杉本：結構役に立ちましたね。人文学園のその当時の講師というのがね、いわゆる大学でも講師であったりね、偉い人じゃなくて若い方だったんです。私が習ったのは、新村猛さんを始めとして、久野収ね。後ほど学習院で講師をしましたけどね。それから、飯沼二郎、京都大学の英文科の先生。それから住谷さんとかのお弟子さんで、市川亀久弥さん。市川さんともう一人、主事の先生が二人おられてね。佐々木時雄さんという、これは京都大学の文学部と法学部を両方出はった珍しいお坊ちゃん先生ですね。

須永：以前、川野邦造さんにお話をうかがった時も、久野収先生の倫理学の授業が非常に印象に残っていた、とおっしゃっていました。他方で、新村先生の授業は、トットツと話される感じだった、とうかがいました。

杉本：新村さんは、そうですね。あまりレジュメを作らない人ですね。その場で考え考え喋りはるタイプで、中身は結構あるけれども、決して面白く喋るような先生ではなかったですね。

須永：テーマは自由とか民主主義とかについて？

杉本：そういう一般的なテーマで。新村出さんの息子さんで、あんまり世間のことはよく分からない。生徒の方がみんな社会経験していた。そういう者が入学してきましたからね。

福家：新村猛さんが、戦時中に治安維持法で弾圧されたのは、皆さん知ってたんですか。

杉本：この前もちょっと話しましたようにね、私が人文学園を知ったのは、京都大学でサンスクリットを先行していた大地原豊さんが、うちに飯に食いに来ていろんな話をする中で、人文学園の話は僕は聞いたんですよ。そしたら、新村さんはこういう人やと。

福家：新村猛さんについて、聞いたんですね。

杉本：人文学園について聞いた時に、まず新村出先生の名前が顧問に出てましたからね。竹田省先生と二人。そのお二人のお名前を見て、大地原さんは、そんなインチキな学校じゃないという風におっしゃったので、まあ一回行ってみようかと。ちょうど五、六月で、四月を過ぎてましたからね、昭和二十一年の入学・進学はもうペケでしたから。一年間予備校でも行って進学しようというつもりでしたから、その間行ってみようと。そしたら、割合、刺激が強くてこれは面白そうだなというんで、腰掛けのつもりがずっと居続けることになって。

須永：刺激について、駒尺喜美さんの回想には、当時は男女共学がとても新鮮だった、とあります。杉本さんの感じ方としても、男女共学の人文学園、という印象でしょうか？

杉本：それもありましたけれどもね、やっぱり内容が全然、今までの常識の及ばないところで講義が始まったから。昔の旧制中学の先生というのは結構偉くてね、大抵、京都大学の出身とかね、そんな田舎でも何年かやりましたわ。

福家：常識が及ばないというのは、どういう風に？

杉本：例えば、歴史の授業で言いますとね、世界史だったら、中学校では、いわゆる年代別にね、ずっと下ってくる、そういう内容ですけどもね。人文学園の世界史は違う、テーマ別って言いますかね。例えば民主主義とはどういうものか。言うたら歴史の見方みたいなもの。人文学園ではそういう内容ですね。それが非常に新鮮でしたね。旧制中学では、ギリシャ・ローマから始まって、何がどこで何があったかという、ずっと年代期みたいなもんですね。

福家：世界史を担当されていた先生は？

杉本：東洋史がね、重沢俊郎さんだ。

福家：西洋史は市川承八郎先生さんですね。

杉本：ヨーロッパ史でしたかね。

須永：羽仁五郎さんが来学された時の「Stand or Fall」の講演がとても印象に残っている、とうかがいました。人文学園へエールを送るという趣旨だったと思うんですけど、羽仁講演に触れての感想・印象について、改めて聞いてみたいです。

杉本：今から思えば、羽仁さんというのはアジテーターですわ。その縁で、学園の創立記念日の講演会を祇園の華頂会館かどっかでやったら、超満員になりましたわ。

福家：この演説を聞く前から、羽仁さんのことはもうご存知だったんですか。

杉本：その前にね。羽仁説子さんが来はったそうです。久野先生の紹介だったと思う。人文学園と言っても小さな学校で、財力もあまりなかったんでしょうね。専任の先生は、久野収さんと市川亀久弥さん。

須永：前回、学生の勉強会・研究会があったと聞き、学園新聞『金曜日』を読み直してきました。杉本さんの名前が「資本論研究会」「中国研究会」のところに出ています。先ほど、人文学園は今までの常識に照らして新鮮だったと伺ったんですが、学生同士での議論の中身や当時のこうした研究会の思い出など、うかがってみたいです。

杉本：自由な雰囲気だったせいか、共産党の細胞活動が始まりましてね、あの時から。僕らはそれに反発して。戦後のあの時分は、なにかという街頭のデモ行進が盛んでしてね。人文学園の生徒の中にも授業に出ないでそっちに行くように言うたから、それではあかんやないかということで、ちょっと分裂しましてね。

須永：そういう方がいるので、研究会を通して自分たちでしっかり勉強したい、ということ？

杉本：共産党の細胞ができてて、その連中が騒ぎ出しますからね。

福家：それは一九四〇年代？

杉本：昭和二十一年に人文学園ができてますから。だから、昭和十二、三年の頃ですね。

福家：共産党の細胞ができてるといのは、分かるんですか？そういう情報が入ってくる？

杉本：情報というか、みんな公開してますから。

福家：機関紙とかビラとか。

杉本：そうそう。

福家：どちらかというと、共産党支持の人と社会党支持の人が結構多かったってことですか。

杉本：支部を作っていたのは共産党だけでしたね。社会党は、どちらかと言うと、労働組合とかね。

婦人クラブとかね、そういう。組織的にはオープンでやりました

から。共産党もオープンにやっても、細胞というぐらいやから。

福家：ちなみにその細胞というのは何人ぐらいとかって、分かるんでしょうか。

杉本：もうようわからんけども。何人ぐらいおったかね。そんな大きなもんじゃなくて、せいぜい十人ぐらいなものじゃないでしょうかね。

福家：講師の先生が共産党員、ということもあるわけですね。

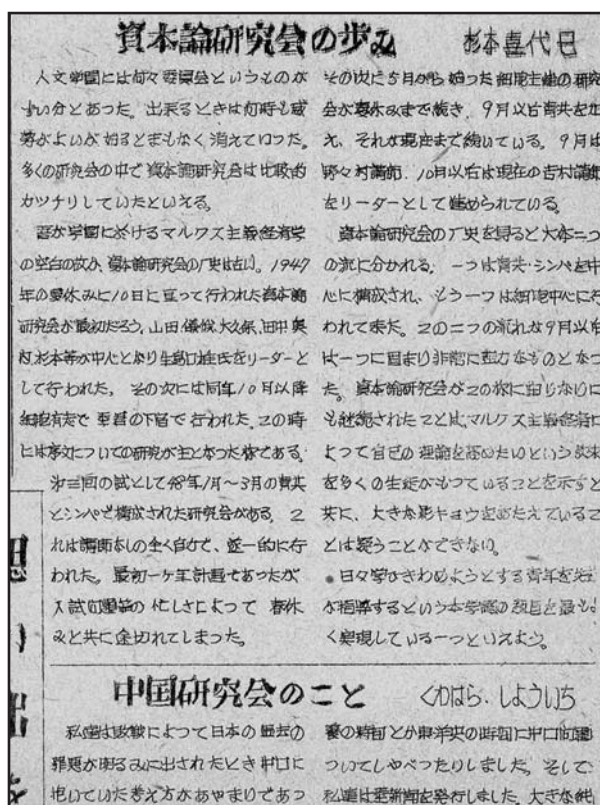
杉本：講師の方はね、党のそういう正式の党員としてはいったかもわからんけども、オープンには活動されてた先生はいなかったですね。

福家：そうですか。じゃあ、学問はまた別だ、教育はまた別だという考え方だったんですね。学生さんの方がそういう政治運動には積極的だった？

杉本：そうそう、学生の方ですわね。

福家：あんまり杉本さんはよく思ってなかったんですか、その細胞の動きを。

杉本：いや、授業に出んに行きよるさかいな。それはあかんで、と。



（「京都勤労者学園所蔵京都人文学園関係資料目録」No28-12）
図4 杉本喜代巳「資本論研究会の歩み」『金曜日』第12号、
京都人文学園自治会中央委員会、1949年3月4日

福家：なるほど、学園をちゃんと大事にしろよ、という。

杉本：そうでなくても、人文学園は卒業資格がないもんやからね、みんな不安がって辞めていく人が多いわね。

福家：月単位で何人もやめていくという感じだったんですか。

杉本：そう。毎日の授業に出てくる人が減りますからね。

須永：一期生の入学者数が百五名で卒業生数が三十五名、三分の一ぐらいになってしまった。

杉本：そういうことですな。

須永：今のお話を聞いて、当時杉本さんが学園新聞『水曜日』に書かれていた「学園のあり方にもっと責任を持つべきだ」という文章（杉本喜代巳「学園の在り方」『水曜日』第10号、岸場利幸、1948年2月11日）の意味合いがよくわかりました。学校の中で一緒に支えないと脱落者の増加に歯止めがかからないというのは、そういうことだったんですね。

こちらは川野邦造さんに寄贈してもらった写真で、メーデーの時の写真と思われます（須永哲思「私立各種学校・京都人文学園の歴史」『人文學報』122号、2024年6月、図2-10に掲載）。メーデーの時は、授業はなかった？

杉本：メーデーの時は確か授業は休みやったと思いますわ。

須永：人文学園側は「街頭デモに行くな」とは言わなかった？

杉本：そういう行くなという姿勢は一切なかった。学園は干渉しない。学校の方針でしたな。

須永：夜間部ができる前後について、卒業資格の問題で中途退学者が出てくるので経営が苦しくなっていく時期、とうかがいました。夜間部を巡っては、当時の在学生や講師の方の間で、どういう議論があったのでしょうか。

杉本：人文学園の主事になったのは、卒業して二年目かな。三年目か。僕が卒業して枚方中学の教員をしている時に、儀我正三郎君というのが夜間部を作ろうということで、大体彼が企画



プラカードに「京都人文学園」「平和」「独立」「水原爆禁止」「自由」「忠犬八公 MSA」、市電行先表示窓に「西大路九条」の文字が見える。

図5・6 1954年前後の街頭デモの写真か（杉本喜代巳氏所蔵）

をして、佐々木時雄さんと飯沼二郎さんと私の三人で運営委員をしていたと思うんですよ。

須永：儀我正三郎さんは、関西文理学院の運営にも関わっておられた。儀我さんの思いとしては、経営を立て直すには生徒数を増加させないといけない、生徒数を増やすために夜間部を作る、ということ？

杉本：増やすというよりも、もう昼間の学校運営はもう無理だろう、と。

須永：そういう決断というか、判断をされたんですね。

杉本：ええ。もちろん講師会議が運営の中心で、重大な時はいつも講師会議を開いていた。

須永：夜間部であれば、働いた後に来れる人が増えそうだと、ということ？

杉本：そうですね。中心の講師だった先生方がね、特に常任であった佐々木さんと市川さんが、飯が食えなくて他のところに行かれる。そういう学校を支える中心部が抜けちゃいますとね。あとはもう時間講師ばっかりになりますからね。一応形式的には集団運営みたいな、あるいは理事会というのもあったけれどね。経営力というか運営力が、もうがたんとなくなりますわね。

福家：その場合に、例えば堀江さんからもっとお金をもらうという選択肢はもうなかった？

杉本：そうですねえ。その辺のことは私もようわかりませんね。

須永：杉本さんは、昼間部時代をご自身で体験された上で、夜間部時代にも主事として関わります。杉本さんの目から見て、昼間部から夜間部への変更というのは、大きな変更ではなかったということになるのでしょうか。あるいは、かなり大きく授業の内容や学園の雰囲気が変わる大転換と見るべきなのか。それとも、やはり基本理念では昼間部から一貫しているとするべきなのか。どんなふうにご覧になっていたのでしょうか。

杉本：講師の方は、あんまり変わってないんですよね。少しは変わりましたがね。やっぱり、生徒さんの層がもう一変したんじゃないですか。最初の昼間の三年生の時は、いわゆる小市民って言いますかね、中産階級の子どもが多かったですかね。一応旧制中学校を卒業して、中には専門学校出た人もいますしね。夜間部の学生は、新制中学の卒業生が圧倒的に多かったんじゃないかったですかね。それで、なんていうか、層がガラっと。

須永：時間帯が昼か夜かという次元の話ではなくて、学生の出身階層が大きく変わった。

杉本：同じ人文学園という名称ですけども、昼間部と夜間部は、そういう風に生徒の層が入れ替わったような感じですね。

須永：主事として着任されて、色々ご苦労があったんじゃないかと思うんですけど。

杉本：そうですね。私自身が労働者じゃなかったですからね。それに労働組合も経験していませんし。夜間部の学生さんたちは、みな強者でしたよ。出身もマルクスのように言えば労働者階級そのものでしたし、学歴も大体新制中学校でしたし。

須永：もう六三制が固まってきますから、義務教育課程修了の中卒者ということですよ。

杉本：そうですね。

福家：年齢も若いってことになるんでしょうか。

須永：昼間部の三年間は、年配の学生もいたと載っていましたが。

杉本：いや、それは昼間部でも例外でしょうね。旧制中学卒業してすぐ出てくるというのが一般的でした。旧制中学から新制中学に変わったのはいつでしたかね。

須永：一九四七年（昭和二十二年）に学校教育法と教育基本法が出るので、新制中学校は四十七年四月からです。四十七年に中学校一年生だった方は、ちょうど五十年の夜間部創設の頃に重なるんだと思います。

杉本：ちょうどだね。

須永：この頃、先ほどの儀我さんが関西文理学院を作られます。資料を拝見する限り、関西文理学院と京都人文学園は法人としては一緒にした上で経営は分ける、ということだったのでしょうか。よくわからなくて。

杉本：いや、そういう構想があったというだけで。実際には経営は別々に独立して行っていた。

須永：だから、実際は学校・法人としても別々なのに、どうして関西文理学院が人文学園に資金援助をせねばならぬのかということが、この後問題になってしまった。

杉本：そうそう。会計がね。

須永：人文学園の側というよりは、関西文理学院側の経営の問題として「そういう支出はおかしいのではないか」という批判が出た、と理解すればいいですか。あるいは、人文学園内でも、自分たちの経営は自分たちでやるべきという内部批判が出た、ということでしょうか。

杉本：理念的にはそうでしたけれども、実質的にはやっぱり関西文理学院からの援助金で生き延びたというのが実態ですね。もうその時分になると、ほとんど堀江さんからの援助金も減ってるわけです。

福家：人文学園の中では、夜間部を作るのはやっぱり仕方がないという感覚だったのか、もっと積極的にやっていこうという感覚だったのか。

杉本：そこの統計でありますように、入学生が減ってきますからね。もう昼間部は未来がないと、関係者はそういう風に思ったんでしょう。

福家：夜間部は生徒数が圧倒的に多い。

須永：ただ、入学者数は増えてるんですけど、卒業者数は結構苦しかったようにも見えます。

杉本：ほんとですね。

須永：働きながら学ぶ学生なので、忙しくて卒業まで通いきれない、ということでしょうか。

杉本：そうですね。

須永：現在の勤労者学園の発足を巡って、『わが青春』掲載年表の記載では、1956年5月21日で一度主事を辞任された後、同年8月22日に復帰した、とされています。かなりご苦労されたと推測するのですが、いろいろと議論が紛糾したのでしょうか。

杉本：雇われではありましたが、私が一応運営の責任を負っていましたから。やっぱりそういうことならば出处進退はきっちりしとかなあかな、と。

須永：その後、理事会で正式に引き続き杉本さんに主事を依頼するということで、復帰されたという経緯なんですね。この勤労者学園として再出発するまでに、どのような議論や批判があったのでしょうか。久野収さんは反対をしたと読んだんですけど。議論のポイントはどの辺りにあったと考えればよかったのでしょうか。

杉本：そういう噂は当事者にもあんまり入ってこんもんだね。

福家：人文学園の主事をやっていた時に、勤労者学園にするという話がある時で来たってことですよね。京都市の方から見ると、人文学園は勤労者学園へするという構想を進めたい、一方で、人文学園卒業生からそれに対する批判があったと書かれてるんですけど。

杉本：卒業生と言ってもね。そういう明確な組織があるわけなし、関心のある人たちが意見を持っていてね。理事のところへ、意見を申しに来るというようなことがあったですね。

福家：そういう意見は杉本さんにはなかったんですか。

杉本：個人的にどうなってるんやという人はいるけども。どうこうしたらええということまで言うてくれる人はあんまりなかったですね。

福家：杉本さんとしても、勤労者学園になることはもう仕方がないと考えていた？

杉本：もう財政的にね。特に京都市からそういう話がありましたからね。これは良い機会っちゅうか、公にした方が続けられやすいと。誰が見てもそうやろね。

福家：京都市側の窓口はどこだったんですか。

杉本：はじめはずっと民政局でしたね。民政局で主幹をしておられた中川忠次さんが中心になっていた。

福家：中川さんは、講師の先生との付き合いなど人文学園との関わりはあったんですか。

杉本：講師とは付き合いがありましたね。渡部徹さん。

須永：石田良三郎『京都勤労者学園史』（京都勤労者学園編集発行、1967年）では、中川忠次さんには戦前の労働学校の経験もあり、市役所の組合と人文学園のスタッフの間である程度の信頼関係があった、とされています。戦前の労働学校と中川さんを経由して繋がるのですね。石田さんの書き方だと、人文学園・昼間部の「人文主義」と「労働者教育」とは、繋がる場所もあるけれど別の部分もあった、すなわち、教育理念をめぐる議論としては「人文主義」と「労働者教育」が一つ論点だった、とされています。

杉本：そうですね。石田さん自身、ずっと京都市主催の労働学校を企画してきはった人やし。また、個人的にも、渡部さんから一緒に研究グループを作って、意見交換はしてはったと思いますわ。そういうことがあって、渡部・石田が繋がって、それに中川忠次さんが共感して。だから、今の京都市が設置する各種学校という形を持ってはったんは、中川忠次さんですわ。

須永：なるほど。

杉本：私も色々資料を調べて、社団法人勤労者学園の定款の草案を作って市役所に出したり、そういう働きかけはしましたけど。

福家：じゃあ、定款の原案を作ったのは杉本さん。貴重なご証言をありがとうございます。

須永：勤労者学園時代まで、ひとまず事前にお伺いしたいと思ったことは、全てお話をうかがうことができました。大変勉強になりました。ありがとうございました。

杉本喜代巳氏インタビュー（2024年10月28日、杉本氏自宅、抜粋）

参加者（敬称略）：杉本喜代巳・お連れ合い・ご息女、福家崇洋・須永哲思・奥村旅人

福家：先日、奥村さんが考えてくださった事前質問項目をお送りさせてもらったんですけど、まずはそちらに基づいて奥村さんから質問をお願いできればと思っております。

奥村：この頃、夜間部の資料を探しているんですけど、やはり昼間に比べると夜間部の資料があまり残ってなくて、夜間部ができた時の様子がいまいまいちわからないんです。昼間部の運営が学生さんが減って厳しくなった時に、夜間部という発想がどの辺りから誰が出されたのか。

杉本：私、人文学園の前に枚方中学の教員をしましてね。夜間はね、その間にできたので、直接創設の頃の事務には関わっていないんですよ。だから、儀我正三郎という男でしてね、長浜バイオ大学、前身の関西文理学院という予備校の設立、運営をした男がいるんです。その人が一番詳しいんですがね。

杉本さんお連れ合い：昨日の晩に復習してたんです。

奥村：儀我正三郎さんは、どういう方ですか。

杉本：儀我くんは、同じく人文学園の昼間部の卒業生、二期生。後輩なんです。私は一番初めの入学で、彼は二期生。昭和二十五年の卒業かな。

奥村：儀我さんとは、杉本さんが主事をされてる間もコミュニケーションを取っておられた。

杉本：自分は官公庁の方が就職しやすかったので、大阪の枚方の中学教員に採用されて、そこで田舎教師をしていたら、事務に夜間部を作るから、俺は昼間部の方を面倒見るし、お前は夜間部見てくれという依頼で。

杉本さんお連れ合い：それが儀我さんですね。佐々木時雄さんは。

杉本：佐々木時雄さんは、人文学園の創設者の一人なんですけれども、人文学園が経営不振になった時に主事を担当していた。最後は動物園の園長さんを務めて、という経緯です。

奥村：杉本さんが主事をされていた時も、学生さんをお家にお呼びになったりしたんですか。

杉本：少しはありましたね。佐々木さんほど、頻繁というか、熱心ではなかったですけどね。

杉本さんご息女：ハイキングとか一緒に行ってたんじゃないの。

杉本：うん、そういう遊びは一緒にしてましたね。一緒にスキーの合宿行ったり、そういう交流はありましたね。ただ、儀我くんは自分の家を学校の近くで持っていましたし、私はもう下宿住まいでしたし、その辺りも少し構えが違ったんじゃないかなと思います。

奥村：儀我さんもお家に人を呼んだりなさってたんですか。

杉本：儀我くんはあんまり。

奥村：そうですか。その時、主事をなさっていた時は、新村先生が名古屋に移られて、久野先生が東京の学習院に移られて、専任の先生が誰もいらっしゃらなくなって。

杉本：そうなんですよ。

奥村：その時に、学園の意思決定はどうやってやってたんですか。

杉本：私がまだ人文学園の主事に入る前に、儀我くんを中心にそういう運営委員会というのができてね。例えば佐々木時雄さんとかも。

奥村：それは儀我さんが中心になっておられた？佐々木さんから始まったとかではなくて。

杉本：その辺はね、私、外れていましたんで、わかりませんね。

奥村：儀我さんは、その後、どういう道を歩まれていくんでしょうか。

杉本：消息不明になって、わからないです。

奥村：予備校を作った時までは、皆さんとも交流があった？

杉本：関西文理の時はもう変わっていましたね。関西文理の主事になったのは、どういう経緯か知らないけれども、京都機関紙協会の事務局長をしていた男が面倒を見ていましたね。

奥村：でも、その頃には儀我さんはもう。

杉本：そう。儀我がいつまで関与して、いつ退散したのかは、私もちょっとわからない。

奥村：ありがとうございます。杉本さんが主事をしておられた時に、来年度の科目とか講師は



図7・8 人文学園主事時代の杉本喜代巳氏肖像（1950年代）、当時の名刺（杉本喜代巳氏所蔵）

どうやって決まっていたのでしょうか。

杉本：科目ごとに講師のグループはできていましてね。私は、いわゆる講師会で、内容・人選を協議して、原案を作って、その運営委員会という組織で承認して、それで執行すると。一応組織はできていました。

奥村：運営委員会には杉本さんも入っておられた？

杉本：運営委員会もちろん入ってきましたけども、設置する時は私は…。

奥村：まだ枚方ですね。

杉本：関与していません。

奥村：後に杉本さんも、主事になられてから、運営委員会に入られた。

杉本：そうそう。もちろん、それは運営の中心になりますから。

奥村：そうですか。運営委員会には新村先生とか久野先生も入っておられる？

杉本：久野先生は運営には入っておられません。

奥村：新村先生は運営委員会に入っておられる？会議には参加されていたのでしょうか？

杉本：新村さんは名誉職になる格好で入ってはいて。会議にも参加しておられました。

奥村：なるほど。一九四〇年代になると、杉本さんが京都人文学園に入られるのと同じ時期に、例えば鎌倉の方で鎌倉アカデミアとか、静岡の方では庶民大学、こういったものができています。鎌倉アカデミアについて、当時をご存知でしたか。

杉本：人づてに聞いたぐらいで、実際にはあんまり知りません。

奥村：主事を務められるようになってから、一九五〇年代ぐらいになると、労働者教育機関みたいなものが京都にいくつかできていると思うんですが、そういったものはもちろん当時もご存知だったと思うんですけれども、どういう風に思っていたのでしょうか。

杉本：向こうという言い方おかしいですけども、新しくできたのはいわゆる共産党系でして、表面では友好でしたけれども、内部ではやっぱり勤労者学園はブルジョワの学校だと。

奥村：学生さんがそういう風に言っていた？指導者同士の間で？

杉本：向こうの指導者が。

奥村：その機関というのは、例えば京都労働者学習協議会みたいなもの？

杉本：それを作って労働組合に浸透すると、そういう戦略だったようです。

杉本さんお連れ合い：鎌倉なんとか〔鎌倉アカデミア〕っていうところの、入学の時は知らなかったけど、経営に携わるようになってから、資料を送ってもらったり。

杉本：あ、それはあります。

奥村：そうですか。

須永：この間、鎌倉アカデミアにも調査に行ってきました。人文学園と同じ一九四六年の創立ですが、鎌倉アカデミアは一九五〇年に潰れてしまいます。人文学園は、その後夜間部になっ

て勤労者学園になって生き残るという点は、大きな違いですね。

奥村：最近では、鎌倉アカデミアと京都人文学園は並び称されることが多いです。西の人文学園、東の鎌倉アカデミアとよく言われるんですけど、当時どういう風にお互いのことを思っていたか、実はよくわかっていないんです。

杉本：そんな名前を知っているぐらいでね。

奥村：なるほど。鎌倉アカデミアから資料送っていただいたというのは、どういう事情で、何のために資料を送っていただいたんでしょうか。

杉本：それは入学の教育内容を参考に。

須永：資料を送っていただいたのは、杉本さんが主事になってすぐの一九五〇年代の頃ですか。六十年代、七十年代になってからのことだったでしょうか。

杉本：もう忘れましたね。

奥村：京都勤労者学習協議会は、いわゆる共産党系。講師同士も、おそらく党派性というか、色々あったと思うんですけど。京都勤労者教育協会、京都地方労働組合協議会というのが、労働学校を当時作っていた。

杉本：それはあまり知らない。ちょっと時代が違うじゃないですか。

奥村：京都勤労者教育協会は、むしろ友好関係というか、割と仲が良かったですか。

杉本：いや、そういう団体も直接交流なかったですね。

奥村：そうですね。

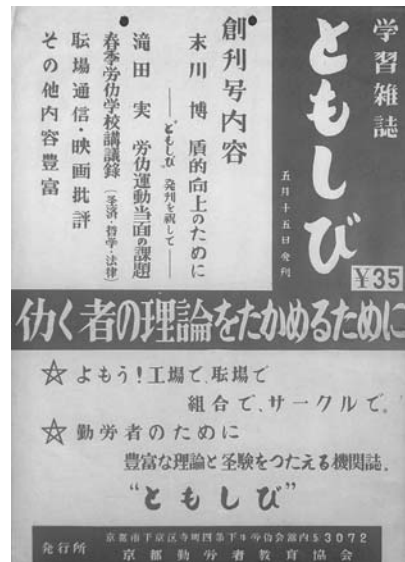
杉本：今の人文学園そのものが、四十六年の春ですし、それから三年経ってから、夜間部が出てきますから、ちょっと時代がずれてると思います。

奥村：なるほど。京都勤労者教育協会と最後合併することになるというのはあってますか。

杉本：京都市と京都府と一緒にやる、やったら援助してやると。

奥村：そういうことですか。京都勤労者教育協会と一緒にやるなら援助が出るという形は、市とか府と、元々手を組んでいらっしゃったということでしょうか。

杉本：いや、市と関係がなかったと思います。京都勤労者協議会と、どこでもいいけども、要するに一つにまとまると。で、労働組合と連携しろと。それが行政の条件でした。



（「京都勤労者学園所蔵京都人文学園関係資料目録」No79-10）

図9 京都勤労者教育協会編『ともしび』（第1号、1955年5月）の創刊案内ポスター

奥村：行政の方から、労働組合と連携するということを求められた。

杉本：そうですね。

奥村：それまでの夜間部は、あまり労働組合と連携することはやってなかった？

杉本：なかったですね。

奥村：そうですか。学生さんは、割と組合の方が多かった？

杉本：学生はそういう傾向がありましたけれども、それをむしろ自分たちで遊ぶとかね、自分たちとして交流するとか、そっちの方に関心があったようで。

奥村：少なくとも運営委員会の人たちとしては、組合とか特定の党と、連携したりってことは特になかったんですね、夜間部になっても。

杉本：もう忘れましてね、あの時の雰囲気は。その時代に、労働組合の中にも、やっぱり共産党が勢力を伸ばそうという動きが強くありましたしね。勤労者学園がそれに利用されるんじゃないかという恐れを労働組合の方は持っていましたから、あまり歓迎しなかったですね。

奥村：なるほど。人文学園としては、昼間部からの伝統と言いますか、人文主義みたいなことを昼間部、特に新村先生がおっしゃってたかと思います。それをある意味守り通すというか、夜間部もそういう雰囲気だった？

杉本：そうですね。できれば、しかし、やっぱり實際上、実務上に役に立つことも必要だということで、労働法とかね、そういう労働関係の評価目に重点を置くと。

奥村：役に立つというのは、例えば運動とか闘争で役に立つ、ということ？

杉本：そう、そうですね。実際の組合の運営とか。

奥村：夜間部になった時に、労働組合の歴史や労働法の授業が急にできると思うんですけど、それは夜間部の学生さんがそういうことをやってくれと求めたというイメージですか。

杉本：そうですね。そういう要望がやっぱり労働組合の中で強かったですから。

奥村：杉本さんが学生としておられた時の、昼間部の一回生の方々からは、いわゆる運動で役に立つことを教えてくれという要望はあまり出なかったんですか。

杉本：そうですね…。一部ではどうかわかりませんが、全体として、人文学園の教育と労働組合の運動とを結びつけるという風な考え方はなかったと思います。

奥村：なるほど。新村さんが初めに掲げられた人文主義という考え方には、組合の運動につなげようという雰囲気を感じなくて。

杉本：そうですね。新村さんは別にそういう労働組合の出身でもなかったし、それにあんまり興味を持っている方でもなかったですからね。

奥村：夜間部になると、学生さんの雰囲気が変わりますよね。

杉本：そうなんですよね。

奥村：出てくる要望が変わったというか、教えてほしいことが変わったということでしょうか。

杉本：そうですね、今から思えば、そういうことですね。

奥村：労働組合の歴史とか、労働組合法の先生とか、例えば、渡部徹さんとか、そのあたりの方が参加されるようになる。例えば、新村先生とか久野先生とかは、学生さんとお付き合いをされていたと思うんですけども。

杉本：そうですね。それほど密ということではなかったと思いますけどね。密なのは佐々木さん、期間は短かったけども、市川亀久弥さんとかね。

奥村：いわゆる主事のお二人。じゃあ、夜間部になっても、あまり先生が学生さんと密に関わるということではなかった。

杉本：あんまりなかったですね。むしろそういう影響力をもったといえば、佐々木時雄さん。自分の家に学生を呼んで、そこで色々お話をするとか。佐々木さんの方が熱心でしたね。

奥村：そうですね。やっぱり佐々木さんが一番。お金の話もちょうと伺ってみたいくてですね。主事を務められていた期間の夜間部の財政というのは、基本的には関西文理学園からのお金で成り立っていたというイメージですか。それとも別の財源があった？

杉本：そうですね、関西文理学園からの寄付金ですね。

奥村：それが一番大きな財源。その他には大きな収入はなかったですか。

杉本：そうですね、私もよくその経緯はわからないけれど、堀江友広という実業家がいる、堀江さんの関係でかなりの資金が学園に入った。同志社の総長をした住谷悦治さんの奥さんのご兄弟が堀江友広さんという実業家で、その縁で結構な金額が学園の方に入ったと思うんですよ。

奥村：住谷さんのお話を見ますと、堀江さんは、この人文学園を作る時に、すごく大きなお金を出したって聞いたことがあるんですけど、夜間部になってからも、堀江さんはお金をちょくちょく出してくださっていたんですか。

杉本：私が主事をした時には、月額いくらかは出していただきましたね。

奥村：そうですね。でも、資金の大きさとしてはやっぱり関西文理学園が一番中心だった。

杉本：そうですね、金額としてはやはり関西文理学園。

奥村：なるほど。こちらの資料は、おそらく久野収さんと吉田九洲穂さんがお話をしているメモの文字起こしです。久野先生によるとですね、この堀江さんもさながら、勝間さんという人がお金を出したんだという風になっているんですけども。

須永：勝間俊雄さんについては、『わが青春』十三頁に出ています。堀江さんと並んで実業家として名前が出てくるんですけど、覚えてらっしゃいますか。

奥村：勝間さんは、もう杉本さんが主事されてた頃にはもういらっしゃらなかったですか。

杉本：そうですね。

奥村：なるほど、誰なんだろう。ありがとうございます。

須永：「大学設立に関する理想集」（作成年未詳、吉田九洲穂氏旧蔵）という資料は、吉田九洲穂

さんをお持ちだった資料です。日付が入ってないですが、人文学園を各種学校ではなく大学にしようとする構想が示されています。実際に大学にはできなかったですが、一応検討した跡が見える資料です。佐々木時雄さんが作られた資料かと思うのですが。四学部作る場合、二学部作る場合などをそれぞれ想定して財政を検討しています。前回の杉本さんのお話の中で、各種学校は卒業資格がないので、学生さんがなかなか定着しなかった、とうかがいました。

杉本：そうなんですよ。

須永：おそらく、佐々木時雄さんは、主事として大学昇格も視野に構想を練ったものの、やはり在籍的に難しく断念せざるを得なかった、ということを示す資料かと思っています。

杉本：そうですね、昭和二十年に戦争が終わって、人文学園ができるのは昭和二十一年六月ですから。かなり早いんですね。だから、日本がまだどっちに行くかわからへん。

須永：教育基本法も学校教育法もまだ出てないですよ。住谷悦治さんの肩書きから判断して、この資料の作成は一九四七年から一九四八年と推測しています。大学にしようとしていた形跡があることは、大事な話なのかなと思っています。

杉本：はい、そうですね。四十七年ぐらいじゃないですか。まだその時期にはね、人文学園がそんな風な役割を果たすという意識はなかったもんですから。どのようにして生徒さんを集めるかという観点から、色々な話が出てたと思うんですよ。これはその前の話やね。この時代を私は知りませんわ。

須永：理事に色々な方を呼ぼうとした試みもうかがえます。夜間部になる前だと思います。

杉本：そうですね。

須永：夜間にしないで、昼間部を新制高校にできないかという話も学生新聞に出ていました。この資料では理想案と書いてあるように、大学に昇格させるには財源が苦しいと考えていた、ということを経る資料かと思っています。

杉本：そうですね。この資料は、私、全く知りませんね。

須永：そうですね。吉田九洲穂さんをお持ちだったので、おそらく『わが青春』を作るときに集めたものと思われます。このタイトルだけ書いてある表紙だけがラポール京都に残ってて、この中身そのものは吉田九洲穂さんをお持ちだったんです。なので、元々佐々木時雄さんをお持ちだったか、ラポールにあったものを『わが青春』を作るために吉田さんが借りてたものじゃないのかなと推測しています。

杉本：そうかもしれませんね。こういう話があったということは当時聞きましたけれどもね。実際には、私はタッチしていませんので。

須永：杉本さんがまだ学生だった頃で、佐々木時雄さん案件だったんだと思います。でも、だからこそ、今日杉本さんにお伝えできて、資料のコピーをお渡しできてよかったです。

福家：講師の中の重松俊明先生はどういう方なんですかね。

杉本：重松さんは京都大学の教授でした。

福家：どういう方だったのか、どういう経緯で人文学園に来られたかはご存知ですか。

杉本：東洋史の教授で重沢俊郎という教授がいてね。その仲間。京大の先生。もう全然そういう左翼とは関係のない先生ですわ。

福家：人文学園の先生でも、いわゆる左翼的な先生とそうじゃない先生が両方いた？

杉本：そういうことですね。元々、左翼的な先生でないの方が多かったんですよ。

福家：左翼的じゃないってのは、例えばどういう先生だったんですかね。

杉本：例えば、青山秀夫とか。今の重松さんとか、重沢俊郎とか。そういうオーソドックスな、アカデミーな方々。あとはちょっと思い出せない。

福家：左翼的というのは、新村猛さんの人民戦線的な。

杉本：そうですね。

福家：新村さんもそうですし、佐々木時雄さんとかも、どちらかというと。

杉本：佐々木さんは、その時はまだ京大の学生さんでしたし、学生運動のリーダーとして捕まってますね。

須永：一九三八年に「京大ケルン」・『学生評論』関係者として検挙された時のことですね。

福家：左翼的な先生で覚えておられる人というのは、渡部徹さんなんかですかね。

杉本：そうですね。渡部さんとか。

福家：あとは、他に覚えておられる先生はいますか。左翼的な先生で。

杉本：そうですね…。もう他にあんまりいなかったんじゃないですかね。

福家：左翼的な先生とそうじゃない先生がいたけれど、お互いに別に仲が悪いわけではなくて、一緒に協力してやっていた、ということなんですかね。

杉本：そうですね。あまり先生方同士の交流もなかったと思うし。喧嘩する材料もなかったね。人文学園を介しては。

福家：人文学園で先生同士の交流はそんなに盛んではなかったんですかね。

杉本：ほとんど講師会。講師会を年一回開いて、次の年度のカリキュラムと、担当者を決める。

福家：みんなが集まるのはその時ぐらい、ということなんですね。

杉本：そうですね。そういうグループ単位で。全体が集まるということにはなかった。

福家：じゃあ皆さん授業をやりに来て、終わったらもう帰っていく。ずっと人文学園にいる人は、やっぱり主事と学生さんがほとんどで、普段から交流がすごく深くなってくる。

杉本：そうですね。特定の講師と交流はあったけども、全体としては授業を介しての付き合いや接触がほとんどだったですね。

福家：先ほどおっしゃってた運営委員会では、議論は盛んだったんですか。

杉本：結構活発だった。単なる名目的な諮問機関じゃなくて、実質討議をできていたんじゃない

いでしょうかね。

福家：新村猛さんもよく発言をされてたんですか。

杉本：新村さんはああいう方で、口が重い人だから、あまり発言はなかった。ですけど、やっぱり最終的には、ちゃんと決着をつけると。

福家：やっぱり新村猛さんの発言は重い？

杉本：ええ、重いです。

福家：新村出さんは、学園には全く関わりはなかったんですか。

杉本：顧問の名前はありましたけどもね。実質関与はなかったですね。

福家：寄付とかそういうのもなかったんですか。

杉本：お金の方ですか。なかったですね。講師の方で堀江さんからはお金をいただきました。

福家：そうですか。堀江さんは普段学園とかには来てたんですか。

杉本：いや、全く来ない。

福家：じゃあ、お金だけ寄付してくれる。

杉本：口出しはされなかったですね。

福家：そうですか。素晴らしい。

杉本：そうですね。今から思えば。

福家：夜間部に対して、新村猛さんはどういう印象だったのでしょうか。

杉本：どうだったでしょうねえ。賛成ではあったんでしょうね。最後まで、学園長を辞めなかったから。

福家：なるほど。仕方がない、という。

杉本：まあ、時代の動きで。新村さんは、平和運動にも関心のある方だったから、そっちの面からもね。学園長というのは、一つのポストというか、権威ですから。

福家：ちょうど昭和25年ぐらいだと、京都だと民主戦線の動きなんかがすごく盛んになって、高山市長とか蜷川知事とかが出てくる時期ですけど、人文学園の学生さんとか、先生もそういうのに結構応援してたってところはあるんですかね。

杉本：結構熱心に、政治家の応援、例えば宣伝カーに載るとか、そういうお手伝いはしていたようですね。

福家：そうですか。学生さんが主にやっていたということですか。

杉本：学生が、自主的に。

福家：杉本さんは、あんまりそういう運動にはタッチしなかったんですかね。

杉本：私はねえ、あまりなかったです。田舎教師をしております。

福家：渡部徹さんの印象というのはどういう感じだったんですか。

杉本：口下手だけでも、非常に情の厚い人やったね。

福家：そうですね。研究には厳しい方だったという証言もあるんですけど、学園内では、例えば授業はどういう風にしてたのか。学生に対して結構厳しかったりしたんですかね。

杉本：やっぱり、筋を通す方だったから。

福家：運営委員会には、渡部さんは参加してたんですかね。

杉本：運営のメンバーだったと思いますよ。

福家：自分の言ってることをこう筋を持ってこう通す、そういう感じの人だった。

杉本：うん。しかし周りの大方の反対を押し切って、行政と手を結ぶと。そういうやっぱり政治的能力もあったんですね。

福家：なるほど、政治的能力もあった。

杉本：渡部さんがそういう、特に京都市との関係をちゃんと整理されたというかね。

福家：それは、今から見てやっぱり正しい判断だった、ということなんですかね。

杉本：それしかなかったでしょうね。財政的にも、社会的にも。例えば、行政との提携については、労働組合もあまり抵抗しなかったから。

福家：学園内では結構反対の意見もあったんじゃないですか。

杉本：ありましたね。特に学生を中心に、反対運動ありましたね。

福家：杉本さんはどういうお考えだったんですか。市と結ぶことに対して。

杉本：もうそれしか生きる道ないと。

福家：そうすると、渡部さんのお考えには賛成せざるを得ないということですか。

杉本：そうですね。むしろ私の考え方を、



（1957年3月30日、京都市下京保健所講堂、杉本喜代巳氏所蔵）

図10 社団法人京都勤労者学園設立総会写真



（1957年5月か、京都市下京区新町七条下る東入る東塩小路町、ラポール京都「学生室」所蔵アルバム所収）

図11・12 京都勤労者学園・京都労働学校の校舎遠景・入口写真

渡部さんが支持してくれた。

福家：そうなんですか。じゃあ、市と結ぶというのは、そもそも杉本さんの考えなんですね。

杉本：いや、あれはね…。やっぱり渡部さんやね。

福家：それに杉本さんとしても賛成だと。新村さんは当時どういうお考えだったんですかね。

杉本：新村さんは、自分の理想とするところではないけれども、やむを得ないと。そういうところじゃないでしょうか。

福家：なるほど。

奥村：思わず長居をしてしまいました。どうもありがとうございました。